



黃表紙十種

全

(岡山製本)

大正三年十一月廿七日印刷
大正三年十一月三十日發行

有朋堂文庫
黃表紙十種
(非賣品)

編輯者兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

黄表紙は、安永天明より文化文政の頃にわたりて、盛に江戸に行はれたる所謂輕文學の一種にして、黄表紙の名は表紙に黄色の紙を用ひたるよりの稱なり。今左に曲亭馬琴の「近世物之本江戸作者部類」の文を借りて、其の起源沿革の大概を叙すべし。

江戸の名物赤本と云へる小刻の繪草子は、享保以來しだいしたり。貞享元祿の間享保までは、さる草子ありと雖も、紗綾形或は毘沙門龜甲形なる行成標紙を以てして、酒顛童子物語、朝顔物語などの繪卷物を小刻にしたり。或は界町なる操り芝居、和泉太夫が金平淨瑠璃の正本を板せしのみなりき。かくて享保よりして後は、丹標紙をかけたるもの年々出でしかば、世俗これを赤本と喚做したり。かくて寛延寶曆より漸々に冊の價貴くなりしかば、代るに黄表紙を以てして、一卷を紙五張と定め、全二卷を十二文に鬻ぎ、三冊物を十八文に鬻ぎたり。そが中に古板の冊子には黒標紙を以てして、一卷の價五文づつ也。世にこれを臭草紙といふ。(中畧)

この頃より畫の外題にして、赤き分高半紙を裁ちて墨摺一遍なりき。その作新しきを旨とし、舌切雀、猿蟹合戦などの童話を初として、或は太平記の抄録、説經本の抄録など春毎に種々出でた

り。價も黄標紙新板一卷八文（二冊物十六文、三冊物廿四文）、古板は七文（二冊物十四文、三冊物廿一文）なりき。（中畧）

かくて明和の季より草ざうしの作滑稽を旨とせしかば、大入君子も是をもてあそぶあるにより、いよく世に行はれて、畫外題を四遍の色摺にしたり。そが中に殊に當り作の新板は、大半紙を二つ切に摺りて薄柿色の一重表紙をかけ、色摺の袋入にして、三冊を一冊に合卷にして、價或は五十文六十四文にも賣りけり。（こは天明中の事なり）

かくて寛政の初より、草ざうしの價又登りて、黄表紙は一卷十文（二冊物二十文、三冊物卅文）、黒表紙は一卷（二冊物十六文、三冊物廿四文）になりぬ。

かくて文化の年より、これらのよろしきものを半紙に摺り、無地の厚表紙をかけて袋入りにしたるを上紙摺りと唱へて、京攝の書賈へ遣して彼所の貸本屋へ賣らせ、こゝにても二三百部は春毎に賣りたれども、價の貴ければにや、草ざうしの一部數千賣れたるには似ざりき。（上紙摺りは三冊を合本二冊三冊にして、壹匁より或は壹匁五分の物あり）（下畧）

右にて其の形式の大概は之を知る事を得べし。

尙その内容につきて略説すれば、寶曆より安永の初までは、前に引ける「作者部類」にも記せる如く極めて幼稚なるものにして、到底兒童の弄び物に過ぎざりき。これ黄表紙の第一期にして、此時代の作者には觀水堂丈阿、富川吟雪、近藤清春等あり。第二期は、安永四年戀川春町が盧生邯鄲の夢の故事を翻案して「金々先生榮華夢」を著して、當世粹子の穴を穿ち、滑稽を主とせしより、俄然として黄表紙は大人の遊びものとなり、春町及び明誠堂喜三二、山東京傳、芝全交以下相踵いで起り、争つて諷刺滑稽の作を出して、一時の盛を極む。これを黄表紙の全盛時代とす。本書收むる所三馬の億說年代記の末尾に記せる所謂「當り作二十三部」、大半は此時代に出でたるもの也。然るに寛政の初に至りて、當時の黄表紙作者中の大立物たりし山東京傳、その洒落本の作によりて幕府の忌諱に觸れしより、影響は黄表紙にも及び、其の作る所勸善懲惡の臭味を帶ぶる事となり、之と同時に南仙笑楚滿人の「敵討義女英」出でて一時の喝采を博せしより、心學物と敵討物との流行を誘ひ、就中敵討物の流行次第に激甚にして、文化三年に至りては、新板黄表紙の全部を擧げて敵討

物たるに至れり。之を第三期とす。而して滑稽洒落を生命としたりし黄表紙の時代もこゝに終りを告げ、これより濃艶なる合巻物出でて、其の後を承くることとなれり。

魚鳥あんばいよし 二冊

作者詳ならず、時代も亦詳ならざれども、本文中よど小市の詞に鶯の美しさを形容して、「それはく、佐野川せいふと來り居ります」とあるによりて、畧これを推定すべし。佐野川盛府は、かの石疊模様に今も市松染の名を残せる名優佐野川市松にして、寶曆十二年四十一歳を以て歿せり。

魚鳥の争は「魚鳥平家」「精進魚類物語」等徳川期以前既に幾らも粉本あり。中にも一條兼良禪閣の作と謂はるゝ「鴉鷺合戦物語」の、鴉方と鷺方との確執の原因を戀の遺恨にしたる趣向は、直接にこの書の粉本たるに似たり。

めくら仙人目明仙人 二冊 富川吟雪畫作

作者にして畫者をかねたる富川吟雪は、浮世畫類考に據れば、通稱を山本九左衛門、諱を房信といひ、江戸大傳馬町二丁目にしにせたる繪雙紙問屋の主人なりしが、家衰へて累代の家業をやめ、遂に畫師になりし人なりといふ。年代は詳ならざれども、作物の今に残れるものより推せば、寶曆より明和安永頃までの人と見えたり。

景清盲目となりて日向に謫居せるを、人丸姫といふ娘の遙々尋ね行くは、謠曲「景清」の趣なり。之に義經の子冠者太郎をからませたるは、蓋し歌舞妓狂言の趣向にして、本篇は之を襲踏せるものなるべし。

右通
槌而

腔多雁取帳

三冊

奈蒔野馬乎人作
忍岡歌麿畫

三馬の億說年代記舉げたる所謂「名作二十三部」の中にして、天明三年江戸通油町の地本問屋薦屋重三郎の刊行せる所也。作者奈蒔野馬乎人は、當時の洒落本作者志水燕十の變名なり。然るに「億說年代記」は、此書を以て喜三二の作とす。但しその誤なることは青本年表に文軒翁既に之を辨ぜり。本書の卷尾、作者の名の下なる印章に「燕十」

とあるを以ても、其の喜三二に非ずして、燕十なる事は明かなり。志水燕十の傳詳ならず。「作者部類」に、「燕十も才子にて洒落本の作幾種かあり云々。三和（唐來三和）と親友にて、合作の小本も出でたり云々。此燕十は他事によりて罪を蒙りて終る處を知らず」と記せり。「雁取帳」以前に燕十屢燕十の名を以て筆を黄表紙に執れり。然るに此書に變名を用ひたるは、或は「作者部類」に記せる犯罪と相關聯せる事情あるには非ざるか。或は「奈蒔野馬乎人」を以て、本書の畫手「忍岡歌麿」即ち浮世畫の名手喜多川歌麿の變名となす説あり。未だ十分なる考據を経ず。

文武二道萬石通

三冊

喜三二作
行麿畫

天明八年刊行の大當り作、これも「名作二十三部」の中にして、蔦屋重三郎の板也。昨年松平樂翁侯老中となりて時弊の匡救に銳意し、只管文武二道の獎勵につとむ。蓋し柔弱風をなしたる當時の武家に取りては、眞に晴天の霹靂たりしなるべく、延いて起れる當時の上下一般の一大恐慌は、之を想像するに難からず。是に於て、安永以來通

人の穴探しもし盡して、珍奇なる題目の無きに苦しみたりし黄表紙の作者、忽ち起つて此の好題目を捉へ、一代の賢宰相が苦心慘憺の經綸を茶化すに一流の諧諷を以てし、以て世俗の新政に對する一種の反抗心に投ぜり。而して其の筆頭を、黄表紙界の老手喜三二の手に成れる此書なりとす。されば此書の一たび出づるや、「古今未曾有の大流行にて……赤本の作ありてより以來、かばかり行はれしものは前代未聞の事なりといふ」(物之本江戸作者部類)此書の評判餘りに喧しかりしかば、戀川春町は翌天明九年「鸚鵡返文武二道」を出し、京傳も亦「孔子縞于時藍染」の作あり。いづれも同じ穴をねらひしものにして、而もいづれも時代に歡迎せられたりといふ。

作者明誠堂喜三二は、羽州秋田侯の家臣にして、當時戀川春町と雁行して洒落本黄表紙作者中の大立物たり。加之、狂歌をつくりては手柄岡持の名一時に高く、狂詩には韓長齡として夙に世に知らる。實に當年の一奇才たりしが、「萬石通」の餘りに世にもてはやされしが爲に、當局の忌諱に觸れ、爲に是より筆を戲作に絶つの已むを得ざる

に至りしといふ。文化十年、七十九歳にして歿す。

鸚鵡返文武二道

三冊

戀川春町作
北尾政美畫

これも「二十三部」の中にて天明九年蔦屋の板也。喜三二の「萬石通」の後篇とも見るべきものにて、其の行はれし事「萬石通」に劣らざりし事は、「作者部類」に、「就中萬石通の後篇鸚鵡返し文武の二道彌益行はれて、こも亦大半紙摺りの袋入にして二三月頃まで市中を賣り歩きたり（流行此前後二篇に勝るものなし）」と記せるを以て知るべし。

戀川春町は安永四年「金々先生榮華夢」を著はして、はじめて赤本を大人の讀物にしたる黄表紙作者中の先輩にして、烏山石燕に學びて畫をもよくせしかば、其の黄表紙には自畫作なるもの多し。上にいへる「榮華夢」及「高慢齋行脚日記」など皆自畫作なり。「鸚鵡返」の流行餘りに甚しかりしかば、樂翁侯より呼出されしが、病の爲に參らず、やがて寛政元年卒去せりといふ、年四十六、身分は駿州小島侯の藩士なり。

北尾政美は、鰐形蕙齋が北尾重政の門人たりし時の名也。「浮世畫類考」稱して「近世

の名人」とす。「蕙齋略畫式」等、多く彩色摺の畫手本を出して畫名世に高かりし人。

世上洒落見繪圖

三冊

山東京傳畫作

寛政三年蔦屋板。山東京傳が洒落本作者の巨擘たると共に黄表紙に於ても亦一代の鬼才たることは、特に絮説することを要せず。然るに其の作動もすれば、風紀上之を採るに憚るべきもの多く、爲に其の代表作と稱せらるゝものを掲ぐることを得ざるは、校訂者の遺憾とする所なり。而も本書の着眼亦頗る奇抜にして、世の所謂通なるもの行き方を寫して其の行き過ぎを嘲る所、春町の「楠むだいき」と同巧異曲にして、作者の才氣を窺ふに餘りあり。這の奇才子の面目を傳ふるに於て、蓋し亦足らざるを憂ひざるべし。京傳亦浮世畫を北尾重政に學びて、畫名を政演と號し、屢、人の爲に黄表紙に畫き、又自作のものにも畫けり。而して京傳が黄表紙に畫筆を執る事は、本書の出でたる寛政三年を以て終とし、本書は實に其の最後の自畫作なり。

形容化
景唇動
鼻下長物語

三冊

芝全交作
北尾政美畫

寛政四年鶴屋喜右衛門板。これも例の「二十三部」の中也。當時の子供の口ずさびに唱ふる詞を取り集めて趣向を立てたる所、一寸目新しくて、落を取りしものと見ゆ。青本年表に、「文軒翁云、芝全交が長物語大に名あり。此前に杜芳作に同じ趣あり、外題年號を逸す。追考して記すべし。全交作は是に擬して出藍なり。此後築地善好が小田原相談、續物と曰ふべし」

全交（寛政五歿）は通稱山本藤十郎、江戸の能狂言師にして滑稽の才あり。筆を黄表紙に執りて、所謂當り作多く、名聲京傳と相如きたりといふ。「大悲の千六本」「十四傾城腹の中」「大ちがひ寶船」等は其の作の主なるものなり。

竈將軍勘略之卷

三冊

時太郎可候畫作

寛政十二年薦屋重三郎板。時太郎可候は、浮世畫の泰斗として名聲今や世界に轟ける葛飾北齋が、筆を戲作に執りし時の戲名にして、「勘略之卷」は實に其の黄表紙に於ける處女作也。北齋是より屢々黄表紙の作あり、其の名聲は籍甚といふ程にはあらざりし

も、亦作家として相當の價值を認められしは、其作の年々續出せるにても知らるべし。本書の趣向は、彼の卷首の「魚鳥あんばいよし」の流亞にして、「世帯平記」と全く同じ趣向なり。但その何れが兄何れが弟たるかは、未だ考證を経ず。

曲亭一風京傳張

三冊

曲亭馬琴作
畫者未詳

享和元年蔦屋重三郎板。文名一代を壓したりし曲亭（嘉永元歿、八十二）も、享和頃には未だ平凡なる黄表紙作者たりし也。寛政三年「京傳門人大榮山人」と名のりて其の處女作を出せし以來、折々作は出せども、餘り歡迎はせられざりしと見ゆ。此書は寛政八年に、京傳の「心學早染草」に擬せる「四遍摺心學草紙」と同じく、聲名當時の文壇に喧しき京傳をかつぎて、其の行はれん事を僥倖せし作なるべし。その所謂「京傳張」は、京傳の店にて賣る煙管を材料に用ひたるを示すと共に、暗に作風の京傳に髣髴たるものあるを思はしめん積なるべけれど、因縁咄のしつこさは京傳の洒落なる作風に似るべくもあらず。曲亭は到底黄表紙の作者にあらざる也。而も曲亭の黄表紙としては、

本書の如きは蓋し上乘のものなるべし。

又焼直
鉢冠姫

稗史億說年代記

三冊

式亭三馬畫作

享和二年西宮與八板。年代記に擬して稗史の變遷を略叙し、作者畫家の名字を集め、當り作の一覽を示し、各派の畫風の相違より出板元の住所目印までも漏さず、而も終始一種の興味を以て之を行る。間、誤謬あるを免れずといへども、亦黃表紙界の珍として、趣味を江戸時代の輕文學に有する者を朵願せしむるに足るべし。蓋し本書并に「小野篁諱字畫」の如きは、式亭(文政五歿、四十八)の擅場なるべし。

以上の十書、何れも原本をその儘寫眞版に附し、上欄に本文と同一の文言を掲げたり。各書の扉亦原本二卷又は三卷中の一をそのまゝ撮りたるものにて、その上中下等の文字は本文に關係なし。

大正三年十一月

校訂者

武

笠

三

目 録

魚鳥あんばんいよし	一
めくら仙人目明仙人	二三
啞多雁取帳	四五
文武二道萬石通	七七
鸚鵡返文武二道	一〇九
世上洒落見繪圖	一四一
鼻下長物語	一七三
竈將軍勘略之卷	二〇五

曲亭一風京傳張……………二二七

稗史億說年代記……………二六九